

## 意味類推を利用した漢字学習教材の開発

### Development of Kanji learning materials using the analogy meaning

堀川 祥平<sup>\*1</sup>, 山口 真之介<sup>\*1</sup>, 大西 淑雅<sup>\*1</sup>, 近藤 秀樹<sup>\*1</sup>, 津森 伸一<sup>\*2</sup>, 若菜 啓孝<sup>\*1</sup>, 西野 和典<sup>\*1</sup>

Shohei Horikawa<sup>\*1</sup>, Shin' nosuke YAMAGUCHI<sup>\*1</sup>, Yoshimasa OHNISHI<sup>\*1</sup>, Hideki KONDO<sup>\*1</sup>

Shin' ichi TSUMORI<sup>\*2</sup>, Hiroataka WAKANA<sup>\*1</sup>, Kazunori NISHINO<sup>\*1</sup>

九州工業大学

<sup>\*1</sup> Kyushu Institute of Technology

<sup>\*2</sup> 近畿大学九州短期大学

<sup>\*2</sup> Kyushu Junior College of Kinki University

Email: m237210s@iizuka.isc.kyutech.ac.jp

あらまし：研究では、非漢字圏の外国人留学生が自律的に語彙拡張できるようになるための学習方法を考案し、それに基づいた漢字教材の開発を行った。2字熟語の語彙拡張をさせる方法として、2つの漢字から意味を連想する意味類推という学習方法を用いる。また、開発した教材では意味訓、語構成という2つの学習要素を利用して、意味類推法を学習させる。

キーワード：漢字オンライン教材, 2字熟語, 意味類推, 意味訓, 語構成, 非漢字圏留学生

#### 1. はじめに

日本に訪れる非漢字圏の留学生にとって、漢字学習が語学上の大きな課題となっている。日本の漢字は常用しているものだけでも2136字もあり、それを組み合わせた熟語となると膨大な量になる。そのため、1つ1つの熟語の意味を理解・記憶することが学習者にとって大きな負担となっている。

そこで、留学生の学習負担を軽減する手段として、意味類推という方法に着目した。意味類推は漢字1字1字の基本的な意味・用法を理解することで、複数の漢字が組み合わさってできた熟語の意味を類推する方法である。

本研究では、非漢字圏の留学生に2字熟語における意味類推ノウハウを理解・会得させること、学習者の読解力を向上させることの2つを目的とし、学習する媒体としてオンライン教材の開発を行った。

#### 2. 漢字教材の設計

2字熟語を意味類推するうえで必要となる能力は、熟語を構成するそれぞれの単漢字の意味を正確に捉えることと、左右どちらの漢字が熟語の中心的な意味を担っているかを捉えることである。それぞれの能力を育成するため、「意味訓」と「語構成」という2つの学習要素が必要であると判断した。

意味訓とは、それぞれの漢字が日常の中でどのような用法、意味を持つかをその漢字の基本的な意味として扱ったものである。

語構成とは、2字熟語を、構成する品詞によって分類したものであり、それぞれの分類において、意味の中心部が定義されている。語構成は全部で9

種類あり、本研究では使用頻度の高い、連体修飾、連用修飾、補足の関係を漢字教材の中で扱った。

漢字オンライン教材では、意味訓・語構成の両方を用いた意味類推方法を採用しており、具体的には、以下の手順で意味類推させるようにした。

- 1) 熟語を構成する漢字について、それぞれの意味訓を導出する。
- 2) 得られた意味訓を品詞に当てはめ、2つの品詞構成から該当する語構成に分類する。また、分類した語構成から意味の中心部を決定。
- 3) 得られた意味訓・意味の中心部から熟語の意味を類推する。

#### 3. 漢字教材の開発

開発したオンライン教材の基本的な構成内容はオリエンテーションと問題出題の2つからなる。

オリエンテーションは、学習に必要な事前知識を伝えるためのものであり、教材の使い方・流れを示すほか、意味類推の概要や、意味訓・語構成について説明を行っている。

問題出題では、「事前テスト」「練習問題 A, B, C」「トライアルテスト」「最終テスト」「アンケート」を用意しており、学習者はこの順番で取り組むようになっている。

事前テスト、最終テストは学習の前後で学習者の読解力がどれほど向上したかを評価するための項目である。

練習問題 A, B, C はそれぞれ、意味訓を導出する問題、語構成を分類する問題、語構成から意味を導出する問題で、各学習要素について、重点的に学習するためのものである。

練習問題 A, B, C の各問題画面を図2に示す。



図 2：練習問題 A(上), B(中), C(下)の各問題画面

練習問題 A, B, C ではデータベースから問題をランダムで 10 問選択し, 出題するようにした. (p1)~(p3)では, 各問題におけるヒント(図中では HINT)を提示しており, 学習者はこのヒントを参照してそれぞれ解答するようになっている. なお, (p4)~(p6)は, それぞれの問題における解答欄であり, 解答後に正解答が表示されるようにした.

トライアルテストは練習問題 A~C の流れをひとまとめにしたもので, 練習問題 A~C で学習した内容が, 意味類推にどう関係するのかを学習させるための単元である.

アンケートでは漢字オンライン教材に対する評価や, 各学習要素についてどのくらい理解できたかを答えてもらうための質問を設置した.

#### 4. 実践方法・結果

開発した漢字オンライン教材が非漢字圏以外の留学生に対して, どのような学習効果を与えるのかを検証した.

実践では非漢字圏留学生 5 名と漢字圏留学生 2 名の計 7 名を対象とし, 実践期間は 10 日間とした. (各学習者は便宜上 a, b, c, d, e, f, g とした.) 以下, 実践結果について述べる. 最終テストにおける正答数とその内訳について表 1 に, 事前テスト-最終テストにおける取得点数の比較を表 2 に示す.

表 1：最終テストにおける正答数とその内訳

	意味類推に 成功した数:◎	意味類推に 失敗した数:☆	既存の知識で 正答した数:-	既存の知識で 誤答した数:*
非漢字圏:a	10	18	2	0
非漢字圏:b	4	1	24	1
非漢字圏:c	4	7	15	4
非漢字圏:d	4	3	22	1
非漢字圏:e	9	3	14	0
漢字圏:f	10	7	16	1
漢字圏:g	6	2	21	1

表 1 において, ◎は問題の熟語に対し未知の状況で正しい意味が推測できたことを示しており, ☆は未知の熟語に対し正しい意味が推測できなかったことを示している.

表 2：事前テスト-最終テストにおける取得点数

	合計点数(合計30問/30点満点)	
	事前テストに おける点数	最終テストに おける点数
非漢字圏:a	10	12
非漢字圏:b	23	28
非漢字圏:c	11	19
非漢字圏:d	26	26
非漢字圏:e	20	23
漢字圏:f	25	26
漢字圏:g	25	27
平均点	20	23

#### 6. 考察

表 2 を参照すると各学生において, 意味類推の成功による点数の取得が確認できる. 特に, 非漢字圏留学生 a は, 表 2 より合計点数を確認すると, 正解した 12 問中 10 問が意味類推による得点であり, 学習の効果が顕著となっている. また, 非漢字圏留学生に対し, 漢字の語彙知識が豊富な漢字圏留学生 f, g についても意味類推の利用によって取得点数を増やすことに成功している. この結果から, 各学習者において意味類推の活用と, その成功が確認できるため, 本研究のアプローチによって, 意味類推ノウハウを理解・会得させることができたと言える. また, 非漢字圏留学生と漢字圏留学生の間に大きな取得点数の差異が見られないことから, 本教材のアプローチが双方の学生に対し有効であったと考えられる.

表 2 の結果を参照すると事前テストから最終テストにかけて学習者全体において取得点数が向上していることから, 学習者の読解力を向上させることができたと言える.

なお, アンケートにおいて, 学習者から, 教材で得た知識を日常生活にも活用できるという解答(5段階評価: 7人中5人から4以上の評価)をもらっており, 今後の漢字学習において意味類推ノウハウを利用してもらうことが期待できる.

#### 6. おわりに

実践結果では省略したが, アンケート結果からは, 漢字オンライン教材に対して以下のような要望が寄せられた.

- ・学習者のレベルに応じた問題設定を行って欲しい.
- ・扱う熟語の量を増やして欲しい.

今後の具体的な展望としては, 上記の課題点を踏まえ, 出題のシステムを改良していくとともに, 問題量を増やすことで, より多くの人に取り組んでもらえるようにしたい.

#### 参考文献

- (1)加納 千恵子, 清水 百合, 大神 智晴, 「漢字教材を作る」, 株式会社スリーエーネットワーク(2011), pp.12~130